As I Lay Dying の構造

The Structure of *As I Lay Dying*

山　下　　　昇

1

1930年に出版された William Faulkner（1897–1962）の5冊目の小説 *As I Lay Dying*[1] は、技法と主題の上で飛躍的な発展を成し遂げた前作 *The Sound and the Fury*（1929）を受け継いで、更に大胆な技法上の試みを示している。また主題の点においては、名門崩壊を扱った前二作とは打って変わって、Yoknapatawpha 郡に住む普通の人々の生活を採りあげている。これには1930年という大不況の時代が、彼の住むミシシッピ州の普通の人々の生活に目を向けさせる契機となったという一面も否定できないであろう。しかしだからといってこの小説が Erskin Caldwell（1903–87）の描く小説と同様のものであるというわけではない。

As I Lay Dying は貧しい農民 Bundren 一家の姿を描いている。この素材が Dianne Cox が指摘するように「Snopes もの」から派生していることは明らかである。[2] 1926年に着想し、27年に中断してしまった "Father Abraham" の Snopes を始めとして、Frenchman's Bend の農民が多数登場し、"Spotted Horses" の馬が Jewel Bundren の馬として登場する。またこの作品における Billy Varner や Tull, Quick, Armstid など Frenchman's Bend の住人の登場場面（とりわけ Bundren 一家以外の人物による16のセクション）は、1940年に出版される *The Hamlet* をほうふつさせるものである。

As I Lay Dying は Addie Bundren を埋葬するために旅する Bundren 一家の10日間にわたる物語である。その物語は59のセクションから成っていて、これを15人の人物が語っている。主要な語り手は次男 Darl Bundren で、約3分の1にあたる19セクションを語っている。次に4男 Vardaman が10回、隣人 Vernon Tull が6回、長男 Cash 5回、長女 Dewey Dell が4回、父親 Anse 3回、Tull の妻 Cora 3回、医師 Peabody 2回となっている。他の人物、すなわち、母親 Addie, 3男 Jewel, 牧師 Whitfield, 農夫 Samson, Armstid, 薬剤士 Mosley, MacGowan はみな1回ずつ語っているだけである。これらの語

りがそれぞれにどのような特質をもっているのか、それぞれのセクション相互の関係はどのようなものなのかを少し詳しくみてみよう。

物語は（一部を除いて）ほとんど直線的にクロノロジカルに展開する。ただし展開のテンポには当然緩急があり、長い（多くのセクションが費やされている）一日もあれば短い一日もある。とりわけ長い一日は第1日目、5日目であり、この両日の重要性は歴然としている。そのことを含めて、物語がカヴァーしている10日間をどのセクションが担っているのか、費やされている分量の多寡はどのような意味合いなのかを考えながら以下に整理してみよう。

1日目：Darl と Jewel がもう一仕事しに出かけた後、Peabody が来診するが、夕刻に Addie は息をひきとる（セクション12)。その前に Tull 一家が見舞いに来て帰る。Addie の死後 Vardaman は Tull を訪れる。明け方に棺桶が完成する（セクション1－19)。つまり全体の約3分の1がこの一日のできごとである。

2日目：葬式に牧師や村の人々が列席する（20)。

3日目：DarlとJewel の帰りを待っている（21)。

4日目：二人が戻り、棺桶を馬車に乗せ、埋葬の旅に出発する。夕刻までに Samson 農場に到着し、一泊する（22－29)。

5日目：Tull の農場近くに戻り、川を渡る。夕食までに Armstid の農場に到着。Cash の治療に Bill Varner が来診する（29－43)。この一日に15セクションが割り当てられていることからも、この一日の重要性が理解できる。また10日間の物語のうちの真ん中の日、全体59セクションのちょうど真ん中にあたるセクション30を過ぎてようやく実質的な旅の前進となる川越えの場面にさしかかることは注目すべきである。この川越えには31－41の11セクションが割かれているが、これがこの物語の最大の山場である。

ただし一応この日に割り当てられているものの内4つのセクションはクロノロジカルな時間展開から逸脱している。32は Jewel 15歳の夏のできごとを Darl が語っているもので、Jewel にとって一頭の馬を手に入れることがいかに大事なことだったかというエピソード を披露し、Jewel の直情径行的な性格を紹介している。また39、40、41は "Cora-Addie-Whitfield Trilogy"[3] として Addie の人生、姦通といった Addie の物語が凝縮して示される。これらのエピソードを描いたセクションがこの川越えの途中に語られるのは、川そのものが女性の力や人生の象徴として機能しているからである。

6日目：Armstid 農場で待機。Anse はらばを手に入れるために Snopes のところへ出かけ、Jewel の馬を手放す条件で話をつけてくる。Jewel は出かける（43)。

7日目：Eustace Grimm がらばをつれてきて、一行は出発する（43－44)。

8日目：Mottson を通って Gillespie 農場へ到着。夜 Darl が納屋に放火する（45－51)。

この一日には7セクションが費やされているが、この日のできごとが結末に結びつくという意味で重要な一日。とりわけ Addie にとっての2度目の厄災である火事の場面においても、先の洪水の場面同様 Jewel が彼女の救い手となる。

9日目：Jefferson 到着。Darl は Jackson へ送られる。Dewey Dell は店員にだまされる。Cash は治療をうける (52−59)。

10日目：Anse は新しい義歯と妻を手に入れ皆に紹介する (59)。

このようにして物語は第2ラウンドに入るところで終わる。いわば疑似円環構造をとっているといっていいだろう。Addie が人生に哲学的な意味を付与しようとしたり、無意味な人生に抵抗しても、それには無関係であるかのように、日は昇り、日は沈み、日はまた昇るように、Anse たち庶民の生活は繰り返しのサイクルのうちに営まれるのだ。その過程にあっては洪水や火事のような困難にも出くわすであろうし、物語のそれぞれの人物のように大事な何かを失いもするだろう。(Cash は片足を、Darl は正気を、Jewel は最愛の馬を、Dewey Dell は堕胎の機会を、Vardaman は母をなくす。) この小説はそうした人生の原型的な物語としての構造を体現している。

2

ところで上述したプロット進行がいわゆるリアリズム小説のように一人の語り手あるいは全知の語り手などによって語られているなら、*As I Lay Dying* は比較的単純な小説だということになるだろう。ところが実際は上に述べたようなプロットは59の断片であるのみならず、15人の語り手によってさまざまに語られているのである。語り手の一人一人がそれぞれの立場や思惑、関心、個性のちがいを有し、多様な語りを展開している。個別の語りの分析が最終的には必要であろうが、さしあたって15人の語り手を大きく3つのグループに分けて検討してみよう。

Darl Bundren が一人で19セクション語っていることから、彼を独立した語り手として考えることに不都合はないだろう。次に Darl 以外の Bundren (Anse, Addie, Cash, Jewel, Dewey Dell, Vardaman) を一つのグループとみなすと6人で24セクションを語っている。そして最後にそれ以外の人々 (Vernon Tull, Cora Tull, Peabody, Armstid, Whitfield, Samson, Mosley, MacGowan) 8人で16セクションを担当している。きわめて大まかにいえば3分の1ずつをこの3つのグループで分け持っていると考えられる。

Darl のセクションは1、3、5、10、12、17、21、23、25、27、32、34、37、42、46、48、50、52、57である。ほぼ均等にばらまかれているので、Addie の死と埋葬の旅のプ

ロットの大筋が示される。同時に Bundren 家の一人一人についての彼の意見が述べられる。とりわけ彼は Jewel にこだわっており、彼のセクションのうち10以上が Jewel について述べられたものである。特に12でクロノロジカルな展開を中断して Jewel の過去のできごとを詳細に語るのだが、それは母の寵愛をうける Jewel への嫉妬に端を発したものであり、母に愛されていない Darl が自らのアイデンティティーを確立できずにいるからである。その結果彼は正気を失い、自己分裂していく。

彼のセクションに描かれていないこととして特筆すべきことは40の Addie の告白である。彼は直感的に母の不倫を見抜き、妹の妊娠に気付くが、彼女たちに同情的でない。Darl は言葉の人であり、言葉の人ではないこれらの女性たちとはちがう立場にいる。それ故 Dewey Dell が二度にわたってドラッグ・ストアーで堕胎の薬を求めようとする場面も彼の語りには現れない。彼が最後に語るのが57で、Jackson へ送られる自分を三人称で語るのだが、この語りに彼の自己分裂が明示されている。彼はここで退場となるので、Cash が語る小説の結末についてももちろん彼の関知しないところとなる。

他の Bundren たちのセクションは、4、7、9、13、14、15、18、19、22、24、26、28、30、35、38、40、44、47、49、51、53、56、58、59である。これを6人が語っている。これらのセクションを通読すれば、Addie の死、埋葬の旅の過程と結末という一応のプロットの概要が把握できる。同時にそれぞれの人物が少なくとも1回は自ら語るので、それぞれの人物の意見なり個性なりが直接ある程度把握できる。あるいはそれぞれのセクションのなかで他の人物について語られもするので、人物の多面的な側面が描き出される。また一家のなかでの人物相互の関係や対立の構図も見えてくる。

一番多くのセクションを語るのは Vardaman だが (13、15、19、24、35、44、47、49、51、56)、彼はまだ8歳程度のこどもなので、事の次第を明確に理解できない。自ら発する言葉は未分化なものが主で、“My mother is a fish” や “Darl is my brother” のように愛着の対象をイメージ化したり、呪文のように繰り返す傾向にある。また語りそのものは他の人物やできごとに対する反応が主であり、とりわけ Darl と Dewey Dell からのはたらきかけに対する反応が顕著である。それは日常的な接触の反映であるといって差し支えないだろう。母親と兄を喪失することになる Vardaman の感覚が短いセクションのなかに効果的に投影されている。

二番目に多く語るのは Cash である (18、22、38、53、59)。彼は基本的に行為の人であり、“a good carpenter” である。立派な棺桶をつくるのが自分の仕事であると自負しているが、多くを語らない。しかし Jefferson に到着し、正気を失った Darl の欠落を埋める立場に立ってからは、彼は理性的な語り手としての役割を果たすようになる。

三番目は Dewey Dell である。彼女は4セクション語る（7、14、30、58)。彼女は自分の

妊娠に煩わされ、何とか堕胎の薬を手に入れようと必死で、そのことしか念頭にないようである。せっぱつまって殺気立っているようすが Jewel や Darl への敵意となって表れている。彼女のセクションは被害者的な立場からの語りであるが、主観的表現にとどまっているため漠然としているので、Bundren 以外の人々の語りと併せて読む時初めて具体的にどのようなことが起こっているのかを知ることができる。

Anse は３回語っている（９、26、28)。彼は言葉だけの人物であり、自分が働かないことを正当化するように、常に自己正当化をおこなっている。しかし彼自身のセクションでは彼は比較的冷静にまわりのできごとを観察して報告している。

Jewel と Addie は１回ずつしか語っていない。Jewel は４で "It would just be me and her on a high hill ...."(p. 15.) と述べて、Addie と自分と二人だけにして放っておいてほしいと願い、Cash を始めとして Bundren 家のもの全員を "And now them others sitting there, like buzzards."(p. 14) と非難している。一方 Addie は40において既に死者となって棺桶に横たわり馬車にゆられながら "the reason for living is getting ready to stay dead"(p. 167) という父の哲学を受け入れる自分の人生を語る。このセクションは一つの独立した短編とも言えそうなもので、彼女をヒロインとした一冊の小説が書かれるべき奥行きを背後に持つものである。Addie にとっての Jewel の存在意義については39において Cora が "He [Jewel] is my cross and he will be my salvation. He will save me from the water and from the fire. Even though I have laid down my life, he will save me."(p. 160.) という Addie の言葉を紹介している。

第３のグループ、Bundren 以外の人々によるセクションは２、６、８、11、16、20、29、31、33、36、39、41、43、45、54、55である。このセクションを通読すれば、Bundren 一家の埋葬の旅のプロットを外側から観察できる。このグループの語りはコミュニティーの声あるいは客観的な外部の観察者として機能している。この人々のセクションは Bundren 一家の内部の報告を補足的に説明したり、対照的に照射することによって、人物をより多面的に描き出すことに貢献している。また Bundren 家の人々の語りでは曖昧模糊としていることがらを具体的に示す役割も果たしている。

その内で一番多くを語っているのが Vernon Tull ６回（８、16、20、31、33、36)、次に Cora Tull ３回（２、６、39）で、Tull 夫妻で合わせて９回、このグループのセクションの半分以上を語っている。実際この夫妻の存在は重要で、いくつかの点で Bundren 夫妻と対照的なものとして作品のなかに置かれている。夫の Vernon は妻の Cora の言動や振る舞いを冷静に受け止めるとともに、Bundren の人々を何くれと手助けしている。Cora は良きクリスチャンであるかのような言葉を常に口にするが、口先ばかりで、彼女の判断はしょっちゅう誤っている（例えば Addie を一番愛しているのは Darl だと主張することな

ど)。Cora は Anse と共通点を持っているが、Vernon はそのような妻を受け入れている。Anse を Addie が受け入れないで夫婦関係が破綻してしまっている Bundren とはこの点で対照的である。

Peabody は2度 (11、54) 語っている。Addie の死の床での診察と Jefferson での Cash の治療に登場して語るのだが、彼のセクションの主眼は Anse 批判である。Peabody の語りは良識の声のように響く。

他の人物はいずれも1回ずつしか語らないが、それぞれに重要なセクションである。牧師 Whitfield (41) は罪の告白をしなくて済んだことを神意だとして自己正当化する俗人であることが明瞭に示される。Samson (29) や Armstid (43) は Frenchman's Bend の共同体の住人の目に映った Bundren 一家の姿を客観的に描き出している。Samson のセクションで注目すべきは、Anse の頑固な個人主義や Dewey Dell の示す険しい態度である。Armstid は Bundren の人々に対して同情的であり、Addie の遺志を実現するために残された者たちがみな力を合わせて努力しているというストーリーを語る。馬車を曳くろばを確保するために、Cash は蓄音器を買うお金を、Jewel は大事な馬を、Anse は15年もがまんしている義歯を買うお金をさしだすという「美談」がこのセクションで紹介される。このセクションは Peabody の非難への反証として提出されていると思われるが、実際のところはどうなのかは容易に判断しがたい。また判断しがたいように描かれているのである。

Moseley (45) と MacGowan (55) はそれぞれ Mottson と Jefferson の町で Dewey Dell の堕胎の相談に対応するのだが、まったく対照的な態度をみせる。一方は道徳を楯にして彼女の願いを一蹴し、他方は彼女の無知につけこんで彼女をだますのである。ただし注目すべきはこの二人の語る Dewy Dell 像がほぼ一致しているということである。Moseley は "she was pretty in a kind of sullen, awkward way, and that she looked a sight better in her gingham dress"(p. 189) と言い、McGowan も "She looked pretty good."(p. 232) と述べている。Bundren の語りでは彼女がどのように見えるのかは判然としないし、Cora は "a tom-boy girl"(p. 8) とか "that near-naked girl"(p. 23) とか言うのだが、初めて出会う第三者には魅力的な女性として映ることがはっきりする。

このような例は他の人物たちについても同様である。Darl や Anse についての評価の食い違いは先に触れたが、例えば Vardaman についても、彼自身の語りや Bundren の人々によるセクションでは10歳にもならない少年あるいは知的障害がある人物のように感じられるが、Tull の語りによれば "like a man"(p. 29), "like a grown man"(p. 30)、とあるようにこどもにしてはしっかりしていると評価されている。

このように3つのグループの語りは、できごとや人物像の形成の仕方、評価、あるいは解釈をだぶらせたり対立させたりして、読者に判断を求めてくる。そのことがこの物語の

比較的単純なプロットを複雑なものとし、人物像においても一面的で平板な描写を脱する手だてとなっている。

3

10日間の物語が59のセクションにおいて15人の語り手によって語られるのをみてきたわけだが、次にその手法がこの小説の主題どのように関係しているのか考えてみよう。その際に着目すべきなのが語り手相互の関係や語られる物語の焦点のとらえ方である。先ほどのグループ分けにおいては、Bundren 家内部の対比および外部の人々という三つ巴の視点を設定したのだが、他にもいくつかの構図が設定できる。

まず第1の構図として Anse 対 Addie という対比である。これは言葉と行為と言い換えてもいいものだが、Anse を中心とする Darl, Vardaman らのグループと Addie を中心とする Jewel, Cash らのグループである。これはこの小説の、生のなかの死、死のなかの生というパラドキシカルな主題を考えるときには有効な区分けである。Addie が死んで埋葬されることによって Anse は新たな生を獲得して物語は第1ラウンドを閉じるのだが、そのレースのなかで Addie や Darl のような現実に根を生やしていない人物は追放されるか、Cash のように再生を余儀なくされるのである。このような観点から見ればこの作品は Bundren 家の再生の物語であると言えよう。その中心人物である Anse の評価をめぐっては、多数の者は Addie (40)、Peabody (54) , Dewey Dell (58) などの Anse 像を根拠に彼のあこぎさを非難しているが、西山保氏のように Anse こそ同情に値する人物であると主張する人もいる。[4)]このようにまったく正反対の解釈が成立するのは、語り手たちの提出する人物像が多面的であり、矛盾する側面があるからである。

第2番目は Addie 対 Darl という構図である。これは1番目の構図の変形のようなものである。言葉に対する不信（=行為）対言葉の対立であり、前者には Jewel, Dewey Dell, 後者に Vardaman, Anse が加わる。Darl は自分は母をもたないと述べ、Addie の「不実」を非難する。またその不義の子であり、母に寵愛を受けている Jewel を嫉妬する。Dewey Dell の妊娠を口には出さないが非難する。こうして Darl はこのグループの全員と対立し、彼の語りのほとんどが彼らに対する敵対意識によって占められている。Darl が遺体を放擲しようとする洪水と放火の二度の機会に Addie を救うのは Jewel であり、放火の告げ口をして Darl を Jackson 送りにするのは Dewey Dell である。Vardaman は彼の陣営に属しているが年少に過ぎて味方になれない。Anse は利己的な立場に立っていて関知しようとしない。結局 Darl は言葉を否定する者たちに敗れて、狂気の世界に追いやられる。しかし言葉否定派の Addie も埋葬されて文字通り葬り去られる。こうして Addie 対 Darl の対立は解消され、Anse と Cash と新しい Mrs. Bundren を中心とした

新たな秩序が形成される。

第３番目は Bundren 一家対共同体という構図である。Bundren 一家が総計43セクションを語っているので、共同体の人々は16セクションすなわち４分の１しか語っていないのだが、これらの人々の語りは外部から Bundren の人々の行動を描いているので具体的でほぼ客観的である。これらの人々の提供する具体的な場面のおかげで、読者は Bundren 一家の悲劇と見えるものが実はこっけいで愚かで時には愚劣なものであることを知らされる。一方 Bundren 家の人々の語りは母の死と葬送における苦難の連続、次男の発狂という悲劇的な素材から成り立っており、個々の人物にそれぞれ重い苦悩としてのしかかっている。ただし、それぞれの人物が孤立しているために全体的に曖昧模糊としたものとしてしか見えてこないのである。その Bundren 家の「悲劇」が、共同体の人々の語りと併せて提示されることによって、物語全体は悲喜劇として現れるのである。

第４番目が第２節で検証してきた三つ巴の構図である。これは上の第３番目の構図をより詳しくしたもので、共同体の観察の対象となる Bundren 一家のなかに構図１や構図２のような対立があることを示したものである。その結果、構図１、２、３のすべてを組み合わせたような形となり、最も総合的にこの小説の構造をとらえてものであると言って差し支えないだろう。

第５番目は男と女という構図である。Anse, Darl, Cash, Jewel, Vardaman, Vernon Tull たち男性と Addie, Dewey Dell, Cora Tull ら女性である。59セクションのうち51が男による語りであり、女による語りは８（Dewey Dell ４回, Cora ３回、Addie １回）しかない。この物語のヒロインたるべき Addie がたった１セクションしか与えられていないし、Dewey Dell も３つのセクションで Lafe や Peabody や Anse による搾取の被害者としての困惑を言葉少なに訴えているだけである。Cora にしてもケーキを売ることしか念頭になく間違った情報の固まりで偽善的なクリスチャンという役割を担わされているばかりである。（最後に登場する Mrs. Bundren は一言も発しない。）このように女たちは発言の機会を奪われ、抑圧のもとに置かれたままである。一方男たちはおのおのの意のままに良かれと思うことを行い、存分に発言の機会を与えられるのである。一度か二度しか発言しない者であってもその語りの内容は極めて明瞭である。つまり男たちの語りは抑圧されていないのだ。このように見れば「死の床に横たわっている」のは Addie だけではない。女たちは皆そうである。

第６番目は直線的な物語と円環的物語の構図である。言うまでもなく Addie を埋葬する Bundren の旅物語は時間的にはほとんど直線的に進行している。ところが Addie の埋葬を終えた直後に Anse は新しい Mrs. Bundren を皆に紹介する。確かに退場した役者も２名いるが、新たな役者を加えて Bundren 一家は再び家族としての体裁を回復して新たな生活を始めるのである。それぞれが自分の大事な何かを失ったかもしれないが、代わり

に何かを得たのである。この意味ではこのプロットも円環であるといって差し支えがない。そのプロットのなかで、クロノロジカルな時間展開を破っている4つのセクションは小さな独自の閉じられた物語を作っている。32 Jewel の馬のエピソード、39 (Cora), 40 (Addie), 41 (Whitfield) の Addie の生涯と姦通の物語は、一体となってこの小説のヒロインである Addie の物語を確固として形成している。いわばこの小説は死んで埋葬されるために運ばれている Addie の外側の物語と、その死んだ Addie の人生の核である内側の物語の二重の構成を有しているのだ。つまり外側の物語の Addie は埋葬されるまでは死んでいないのであって、埋葬されるまでは「死につつある状態で」自分の生を主張しているのである。そして "He [Anse] did not know that he was dead, then."(P. 165) と Addie が言うように、彼女が埋葬され真に死ぬまでは、実は Anse を始めとして Bundren 家の人々は死んでいるようなものなのである。こうした逆説がこの小説に込められているのは明白である。

As I Lay Dying はそのプロットをとらえてみればさして複雑な話ではない。しかしその単純そうな物語は、小説の語りの構造を作り出している技法のせいで、さまざまな解釈を生み出す複雑な構成体となっている。この小説を "kaleidoscope"[5], "multiple presentation"[6], "polyphonic novel"[7] とさまざまに呼ぶのはそうした点を指してのことである。この作品は一見したところ技巧を弄した小説のようであるが、その技巧は単なる「技巧のための技巧」ではない。小説中の人物はいずれも孤立した内面世界をもち、それは interior monologue（内的独白）というこの小説の技法によって表現可能となる性質のものである。また個人の内面と第三者による外面描写あるいはコメントとのずれが常に存在するという事実とともに、ある個人の意識や行動はいくつかの角度からとらえられ、解釈されることによって具体性を帯び、その意味に近づき得るのだと言う理念をこの小説の技法が支えるのである。その意味ではこの小説の技法は主題上の必然である。そして確かにこの点で Faulkner は *tour de force*（「力わざ」）と自負してよい技のさえを見せたといえる。

注

1) William Faulkner, *As I Lay Dying* (New York: Random House, 1964)
テキストには上掲書を用いた。本文中の引用は同書からで、引用末尾のかっこ内にページ数を記した。

2) Dianne L. Cox (ed.), *William Faulkner's "As I Lay Dying" : A Critical Casebook*, (New York: Garland Publishing, Inc., 1985), "Introduction", xx.

3) Joseph Gold, "'Sin, Salvations and Bananas': *As I Lay Dying*" (*Mosaic* VII/1, fall 1973), 55–73.はこの分析を主眼としている。

4）西山　保『ヨクナパトーファ物語:私のフォークナー』（東京: 古川書房、1986), p. 77.

5）William Rossky, "*As I Lay Dying* : The Insane World"(*William Faulkner's "As I Lay Dying"*), p. 186.

6）Cleanth Brooks, *William Faulkner* : *The Yoknapatawpha Country* (New Haven and London: Yale University Press, 1963), p. 159.

7）Judith Lockyer, *Ordered by Words* : *Language and Narration in the Novels of William Faulkner* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1991), pp. 73-74.